

文芸研ブックレット

「今こそ 人間観・世界観を育てる教育を
—— いじめ問題を問う ——」

西郷竹彦講演

一九九五年八月二十一日

枚方文芸教育研究会にて

人間観・世界観を育てる教育と言いますと、大変難しい事のように聞こえるのですけれども、これは、生まれて間もない子供からできることですし、また、先生方だけでなく、ふつうのお母さんたちも、心がけてできることなんですね。そのことを、これから具体的に、皆さんの手元にある資料を使いってお話したいと思います。

教科書の教材になっている詩からいくつかひろって見ました。たとえば、国語で、詩の授業とか、物語の授業をするときや、いろいろな田舎づけ、どういう授業をすれば、子供たちに、望ましい、人間観・世界観を育てることが出来るのかと言つたことを考えていきますよ。そのことで、結果として、わざわざ「はじめ対策」などいろいろなことをしなへとも、「はじめ」という現象が、根本から解決されていくということにもなるわけです。

かけがえのない一人一人

—— 詩 「たんぼぼ」 かわさき ひろし作 ——

「たんぼぼ」という詩があります。「たんぼぼが／たくさん飛んでいく／ひとつひとつみんな名前があるんだ」と。実際には名前があるわけではない。虚構の世界、詩ですから名前があってもいい。どんな名前があるのかと言つて、「おーい／たんぼぼ」「ぼぼんた」「ぼんたぼ」「ぼたぼん」。ほかにもっとあると思うんですがね。この名前もればわかる通り、「たんぼぼ」という四つ文字の順序を、ちょっと入れ替えただけの些細な違いです。「どんぐりの背くらべ」という言葉がありますが、並べてみると、全部同じように見えると思います。ところが、みんな、一人一人が違うんですね。名前が違うように、ほんのちょっとしか違いがないといつても、違いは違いです。

たとえば、双子が生まれて、そっくりだとしても、やっぱりこっちはの子と、そっちの子は違うのですね。同じような、似たような、そっくりさんが二人いるから、一人はいらないということにはならない。つまり、かけがえがない。かけがえがないということは、この世界に一人しかいないということなのです。

「たぼんぼ」というと「ぼぼんた」というのは違うのですね。一人しかいないのです。私たちが、かけがえがないとか、一人一人を大切に言うのは、人間というものは、みんな一人一人個性をもっている、ということですね。その人しかいない、世界中何億という人間がいるとしても、自分はこの世に一人しかいない。あの人はこの世に一人しかいない。そういう意味で、かけがえがないのです。一人一人を大事にということとは、ちょうど「たぼんぼ」「ぼぼんた」という名前のちょっとした順序の違いぐらいの、わずかな違いかもしれないが、「たぼんぼ」は「たぼんぼ」だし、「ぼぼんた」は「ぼぼんた」なのです。と言うようなことを、たとえばこの詩で、考えさせたい。

そして、たぼんぼに呼びかけている人、語り手、話者ですが、「おーい ぼたぼん／＼川に落ちるな」と言っていますね。自由に、それぞれが自分の好きなところに飛んでいきなさい。そして、そこで、自分の人生を始めなさい。でも、せっかくだから、川に落ちちゃいかんよ、川に落ちたら一貫の終わりですね。そういう思いやり、そういうやさしさ。こんなにはたくさんあるんだから、一つぐらい川に落ちたっていいじゃないかということにはならない。さっきも言いましたように、みんな一人一人がかけがえのない、個性、人生をもっているわけですから。

そういうことを、例えば、この詩で一年生、二年生の子供でも、わかりやすい形で考えさせたいということになります。

こういふふうに人間というものは、世界に生きているんだよ、例えば、大工さんが家を建てる、その家を建てる木は、きりぎりしが山から切つて来る、さてその大工さんに、お百姓が米を作つて、その米を大工さんや、きりぎりしが食べる。逆に言うと、大工さんは、そのお百姓のために家を建てる、このように、世の中、持ちつ持たれつの関係で、人間は生きていくわけで、この世界に、一人ぼつんと一人で生きていくわけではない。お互いが、お互いに自分のもっているものを出しあつて生きている、それが持ちつ持たれつという事です。自分が相手にしてあげることが、逆に言えば、相手からしてもらつてもらうことになる。昔から、「情けは人のためならず」なんて言っていますね。本当にその通りです。

人間社会というのは、実に複雑で、さまざまの要素が絡みあつていきますから、すっきりと世の中の有り様が目に見えない。ですからけれども、「雨のうた」のような詩であれば、一年生でも、二年生でも、今言ったような形がわかる。これは雨のことをつたつていられるけれども、雨を題材として取り上げて、実は人間を主題として、テーマとして表現しているのです。結局これは、雨について教えたいわけじゃない。雨というものを題材にとつて、人間というもの、世の中というものについて、このようにわかつてもらいたいというテーマがあるわけなのです。

今、持ちつ持たれつとか、生かし生かされるということを、言いましたけれど、それを相関といひます。相関関係あるいは、相関的にものを見るという事です。あゝ、関わるというか、響きあうとか、関わりあうとか、持ちつ持たれつとか、生かし生かされるとか、そのように、からみ合はつていゝる関係として、そのように物事を見る。これはものの見方考え方の一つです。人間や物事を見る見方、考え方にはいろいろな見方、考え方がありますが、その見方、考え方の中に「相関」といふ見方、考え方があります。

例えば、先生方は一方的に子供に何かを教えている、つまり、子供に奉仕していると、こういう風に、もし、考えているとしたら、そういう見方考え方は、大変お粗末な見方考え方です。間違っではないけれど、大変浅い。確かに、教師は子供にいろいろなことを教えたり、いろいろ奉仕をしています。確かにそれは、その通りだけれど、それでは浅い。

では、深い見方考え方とは、どういうものか。教えることで子供を育てる。しかし、裏返しに言えば、教師も人間として自分を育てる。こういう風に、教師と子供の関係を見る見方、これを相関的に見る見方というのです。これは親でもそうです。親は一方的に子供に奉仕している、犠牲になっていると考えたとしたら、大変つまらない。親は子供を育てる、その中で、親もまた、人間として豊かで幸せであるわけです。そういう見方考え方を相関的に、ものを見る、考えるというのです。そういう見方、考え方を一つ一つの教材で、具体的にわからせていく。それを繰り返して積み上げていく。これが大事なことです。地道なあり方ですけれど、一番確実なあり方でもあると思うのです。

本日の愛情とは

詩「はったのうた」 おうち やすめき 作

はったのうたというのがあります。

「はったのうた」の音がらびんごととびたすはった。「はったは緑色ですから、緑色をしていられる事だと思つていってらるゝ無難色で見えない、見えないといふことば、薄く軟く人間から見えないといふことばです。ですから、事

かららんと飛び出したとき、はっと驚きます。あんなだ、はったがいたのか。それを「草の色から」といふ言
ら方をしているのです。聞いてみれば驚きます。「じっとしてれば／＼はっはとおんなじはった。「じっとし
てれば、驚くはう回して、しまりわからぬぞ。」びよんととほなま／＼見からならぬ。「見からならぬと
らうのは、驚に見つかって食えられたり、人間に見つかって捕まったり、そういう危ない目に会わぬよ。びよんと
とほなま／＼のじ、びよんととほを見つかってしまふよ、と聞いてゐるのです。

語者が、何に「お、あゝおはへ」でござるのですか、語者がはったを見て、やがて気が持たばと思はるわけ
です。とほたつたのじ、あなな／＼よ。とほたつたのじは、見つかからならぬのじ、見つかつたあなな／＼よ、
聞いてみれば回してゐるわけです。回してゐるのは、一りの愛情のあり方な事です。

とほたつた後半に「さ、ちよ／＼驚くはます。」はった／＼草の色から／＼びよんととびだすはった。「文章
は回ります。驚きは回ります。言葉は回りますが、文章が表現してゐる意味内容は、全くちがう。どういふ風に違
かしてゐる一連の組合は、草の中からびよんととびだした、その瞬間に、あゝ、はったがいたんだといふこと、ひ
くひくした驚き。とほたつたのじ、とほたつたのじ、それなのじ、はったは草の色からびよんと
とびだすから、あなな／＼とちよ／＼、じよ／＼思ふが回して、いも／＼。

言葉とじよ／＼のは、同じ言葉でも、使われる場面が違つて、あるは文脈が違つて、意味が違つてゐるのです。
これは言葉の本質です。じよ／＼といふのじ、教えていく必要がありません。

しかして、あ、はったがじよ／＼とじよ／＼と、驚くはになつちやう。はったがはったでなくなつてしまふ。はったが
驚くはう回してゐる。やれじよ／＼と、はったがからね、はったがじよ／＼のじ、びよんととびだすの女、

たの本質、本性なんだ。だとすると、ああ、しょうがないなあ、たとえ、見つかって、危ない目に合うかもいけないけれども、ぼったはぼったらして／＼、ぼったとして生きまのことが幸せなんだろいな。だから、見つからないように、ぼったらしく生きていかなきゃ、と、という風に変わってきているわけなんですね。

これは本当の愛情です。本当の愛情というのは、相手の立場とか、相手の身になる、相手が何物であるかというところをわきまえて、その上で、相手の立場にたつて、相手のどついう生き方が相手にとって生きがいのある生き方なのか、幸せなのかと、や／＼入る思いやりをもつて／＼、それが本当の愛情です。前半の愛情は、言わば、同情にすぎない。同情自体ももちろせん。愛情には違いなければ、それは低い、浅い愛情です。本当の愛情というのは、やはり、相手の本質、相手の身になってそこから考えてあげる、こつこつこつこつです。

鳥は飛ぶのが鳥なのです。魚は泳ぐことが、魚なのです。鳥が翼を失ったり、鳥が翼をく／＼られたりしたのでは、これはもう、鳥ではなくなる。魚が泳げなくなったら、魚の人生はおしまいです。みんなそれぞれ、「たぼんぼ」とか「ぼんた」とか「ぼんたぼ」とかみんな一人一人違いがあります。その違い、個性を生かす、それが幸せであり、また、周りのものも、相手の個性を認め、相手の個性を生かすように手伝つてあげる。このように考えていく。

例えば、こつこつこつこつを、班なら班で語り合う、班で語り合ったことを学級全体で出しあって、語り合っていく。子供同士が語り合う、教師と子供が語り合う。何を語り合うかと言つと、人間について語り合うわけです。人間の幸せとか、何が本当の幸せなのか、何が本当の愛情なのか、何が一人一人を大事にするということなのか、何が人間にとって値打ちがあることなのか、価値あることなのか、そつこつ大事なことを、うんと語り合う。作品というものを聞けば、さういふ十條にして、語がもつちいらつたり、こつこついらつたりしないうつに、いつまでも作品の言葉、文

章を指さしながら語っていけば、どんなに語っていても、ぼろぼろにならず、必ず十條の中で、お互いにそれぞれの違った意見を出し合う。そうすると、語り合う中で、子供はA君というの、Bさんというの、Cさんというのがあるんだ、という発見がある訳です。理解が深まっていくわけなんです。

人間は語り合うという関係なくしては、お互いの理解というのには成り立たない。まあ、見ていただけでも多少は、相手がどういう人間かというのにはわかりますが、だけど、本当にその人間的なテーマをめぐって、日常のいろいろな雑事をやっつけるかというのではなくて、それも語り合う一つのついでにはありますけれども、人間の幸せって何だろう、本当の愛情って何なのかな、そういったことを語り合う中で人間に対する理解が深まるのです。

ところが、今日の学校教育の中ではそういう場がない。例えば、八教科あります。その八教科のうち、人間の幸せとはなんぞやとか、愛情とは何か、人の心の痛みとはとか、掘り下げて語り合う場がどこにあるかというところがない。理科とか社会とかいろいろあります。それぞれそれは教科の独自の目的、役割がありますが、人間について語る場合は、どこにもない。国語科の中で、せいかく詩とか物語があっても、読解の指導におわっている。読解の指導とは、みなさんもわかっている通り、様子、気持ち、わけです。本当の愛情とは何なのか、同情と愛情の違いは一体何なのか、一人一人を大事にというけれど、ではなぜ一人一人が大事なのか、なぜ、一人一人がかかえがえないのか、といったことを、一年生は一年生なりに、四年生は四年生なりに、その発達段階に即してわかりやすい、おもしろい教材で、どことん語り合うという、そういう風な国語の授業というのはめったにない。そうすると、一日の時間の中で、あるいは一週間の学校生活の中で、子供たちはどうで、いつ、人間について、じっくり語り合うというところができないのかという、現在の学校教育の中では、どこにもないのです。

ただ、私たち、文芸研では、せつかく教科書にいい詩が載っていたり、いい物語が載っていたりする訳ですから、その教材を間において、ただ読解力をつけるという、そういうけちなことではなく、人間をわかる力を育てる、人間をわかる力というのは、人間の喜びとか、悲しみとか、人間の心の痛みとか、人間の幸せとか、人間にとっての徳打ちとかそういうものをわかる、そういう授業をする。だから、教材をわからせるといふ読解の指導で終わるのではなく、そこから先、もっと突っ込んで、教材で人間をわかる力を育てる。幸せとは何かということがわかる、愛情とは何かということがわかる、そういう力を育てる。しかも、語り合うという形でそれを育てる。なぜかということ、語り合うことで、より深く、より豊かにそのことをわかるといいうことができます。それから、大事なことは、その中で人間関係ができるということなのです。子供と子供の語り合う関係ができる。語り合っていてこそ、お互いをわかり合っていくことができるし、心のつながり、ますなができていくのです。語り合いもしないで、そんなますななんてできるはずがない。お互いの人間理解が育つはずがないのです。教師も子供たちと一緒にになって語り合う中で、一人一人の子供がどういふ子供かということが、本質的にとらえることができる。逆にいうと、子供も、先生が人間について、どこまでどういふ風に、深く豊かな認識をもっているかどういふことがわかっていくことになります。これを毎日、毎日の国語の時間、せめて、国語の時間だけでもそういう風にして一週間、一月、一年と積み上げていくといふことです。そうすれば、一年たったあかつきには、どれほど子供たち同士のお互いの強いつながりができていくことか、教師と子供のつながりができていくことか。しかも、人間ってどういふもんだな、幸せってこうだな、愛情ってこうだな、と、いふことが、とれだけ子供たちの中に育っていくことか。

そういう教育が、今、欠けている。ない。それがないから、いじめが起きるのです。

「白くほろし」というのがありますね。もう、読まれた方はわかっていると思うのですが、松井さんというタクシーの運転手さんが主人公なのですけれども、六月の夏の暑い日ですね、お客さんに乗せて、運転してきますと、車道のすべりや、小さな白くほろしが落ちてくる。それを、ふっと目につくと、「ああ、風が、もうひびひかますわね、車がひびびてしまふな。」と思う。そうすると、かわいそうだなと、さきほど降りて、そのほろしをもちょうと購入片付けてもらうとする。世の中にタクシーの運転手さんも多いですけど、こんなに親切な、細かいことまで気のく、運転手の人はあんまり見たことがない。たいていぶっきらぼうですね。まあ、忙しくていちいちお客さんの相手なんかしてられないということがあるかもしれませんがね。この松井さんはそうではない。車道に落ちていっているというのならまた別ですが、車道の脇に、歩道に落ちているのでしょ。そんなものは、ちらっと見て、す通りしてもいいわけです。でも、松井さんはそうではない。風がふいてきたら、車道に転げてくるな、そうしたらどこかの車にひかれてしまふ、そしたら持ち主の子供がかわいそうだな。こういう思いやり、非常に細かいことに気がつく人です。周りの出来事に無関心ではいられない人です。

人が何をしようかと、どんな状態でいようと、見て見ぬふりをする、あるいは、見てもそれに気がつかない人が世の中には多い。無関心な状態、現在の日本の人間関係は、お互いに無関心、お互いに関係ないという顔をしている。こういう状態ですね。ところが、松井さんはそうではない。松井さんという人はそういう人だな、そういう人間を、

人間として、子供たちがわかっていく授業です。

ほうしをよけようとするよ、チヨウチヨが飛び出して来る。そこで松井さんびっくりする。ああ、悪いことしたなあ、このチヨウチヨをこのほうしでふせておいたんだなあ、だから、この子が来て、ほうしをあけたときチヨウチヨがいなかったら、さぞがっかりするだろうな、と想像力をはたらかせます。どんなにか、がっかりするだろう、そこで、国の母親が送ってくれた夏みかん、その中でも、一番大きな、りっぱな夏みかんを代わりに、白いほうしの中に入れて、しかも、石でつばを押さえておくという、心づかいをし、細かいところまで気配りしています。こういう人間の姿、すばらしいなあ、とわかることが大事です。松井さんのほんのちょっととしたしぐさ、ほんのちょっととした心づかい、そういうところを子供たちと一緒に、松井さんってすばらしい人だなあそういうところに人間のすばらしさというのがあるのだ、それが本当のやさしさなんだ、とわかる。

思いやりというのは想像力です。想像力というのは人の身になることができるということなのです。人間はだれもが、自分の立場でしかものを見ない、考えない。それは当然のことなのですけれども、同時に人の立場にたつ、人の身になることもできる。これが思いやり。思いやりというのは、思いを同じ側にするということなのです。相手の身に自分になってみるということなのです。それが想像力です。

想像力とはただ頭の中に、いろんなことをあれこれ思いめぐらすことが想像力ではないのです。自分以外のものになることができるということなのです。人の身になる、人の立場に立つことができる、それが本当の想像力です。それを別の言葉で、「思いやり」と日本人はいうのです。

松井さんはやうなのです。石でつばを押さえる。一つ一つ読みを置かれていくと、ああ、この松井さんというものはす

とにだれも気がついていないのです。この間、村山首相も、大河内君の事件が起きましたときに、閣議會議で、政府も地獄社会も学校も果腹も討って一丸となって、いじめ対策に対応しなくてはならないと仰いました。学校長も、教員も、文部大臣も、それを言いました。おそらく、県の教育長も仰っている言、学校長も一生懸命対応したでしょう。でも、そんなことをしてはいるんですけど、また起きてはいます。あつちでも、こつちでも、今こうして語っている最中にも、こつちか、また起きてはいるかも知れないのです。もへり叩きではいけないと、こつちをたたくは、あつちに出てる、あつちをたたくは、こつちに出てるというふうな、おっかけい、い、いたちい、こつちを、しているような状態です。それでいて、なぜこのふうなおさましい現象があとを絶たないのか。それは、根本的な解決がなされていないからなのです。じゃあ根本的な解決とは何か。人間観、世界観を育てることです。今、人間観、世界観を育てるといふことが全くなされていないといふことなのです。小学校から、大学まで、家庭はもちろんです。だから、今、僕たちが言わなければならぬのです。

何もしないことは、何かしていること

——「だから わるい」 オセエワ 作 ——

短い教材で、読まれた方もあると思いますが、犬が猫に吠えかかっている。これは犬と猫のけんかではない。弱い猫を、強い犬が一方的にいじめている姿です。それなのに、二人の男の子がすぐ側にたって、みているのです。何とかするのではないかと、窓から見ていた女の人が、全然男の子が何もしないので、かけおりにきて、犬をおっばらっ

て、「あなたたち、はるか昔ならのー」と、うろたうろたう。ちやうど「あついで、はるか昔ならのー」もしてならぬよー」とうります。「何もしてごらぬよ。」と、うろたうのは、僕たちが猫をうじめたわけでもなし、犬に加勢して猫をうじめたわけでもなし。じまの、何もしてごらぬ。何もしてならぬから悪い」とはなし。じまの、はずかしいとはなし。うろたうわけです。びくびくして、うろたう言っている。それに対して、女の人はおこって「だからわるいのです」と言っています。なにが悪いのか、と、うろたう悪いのか、このうろたうをめぐって、子供たちには、うろたうと考へさせる必要がある。これは今の子供たちは、この男の子たちと五十歩、百歩です。

愛知県の大河内君の事件がありました時に、うじめた子供たちを、うろたううじめたのかと聞いた時、おもしろか、たからと考へたのです。それがあのうじめたの経験なのです。ごうろたううろたう経験がなすのです。これはじまの、あのうじめたが悪いのではなし。さういふ風に言っています、間違った育て方をしている、日本の学校教育、家庭教育、社会教育、すべて、じまの教育そのものの責任なのです。この男の子は、じまの考へたわけでもなし、男の子は何もしてならぬから、悪いならぬ、本当にやう思っている。周囲の言っているのは、じまの言っている、うろたうの言っているのです。え、何で悪いんだう。これは、この男の子たちの中、人間性が育つていなくて、うろたうの言っている。うろたうの言っている、一方的に強いの、悪いものをうじめていられる。うじめたの構造です。けんかではなし。見た目にはちやうど似ていても、けんかといじめでは全く違う。けんかは、ある程度しやうがない。場合によつては必要かもしれない。しかし、いじめはたとえどんないじめでも、絶対にいけない。それはなせかと、うろたう、一方的に強いの、悪いものをうじめていられる構造、それがあるかたります。さういふうろたうの中、女は、強いの、悪いものをうじめていられるのです。何もしないで、うろたうの言っている、うろたうの言っている、それは、それは、一方に強いの、悪いものをうじめていられるのです。何もしてごらぬ、うろたうの言っている、うろたうの言っている、それは、それは、一方に強いの、悪いものをうじめていられるのです。

ることになる。そういう認識が、つまりこの男の子たちにはないのです。そういう間違った認識を持って生きる、そのいづれも悪いと言っているのです。はるかして、言っているのです。

ですから、こういう男の子たちのうちにならないためには、何が必要かと言つて、せめて、国語の時間に、せめて、詩や物語を扱うときに、詩や物語は人間をテーマにしているわけですから、題材は犬や猫の物語でも、それは結局、人間をテーマにしているのですから、人間の問題として、うんと語り合う。語り合う中でいっばい、いろんなものが出てくる。洗ひざらひ出てくるように、きれいな事で、話をかたづけたいかないで、洗ひざらひ、子供たち一人一人がもっているもの、そっくり、はらわたをひっくり返して、間違ひも、過ちも、片寄りも全部出てくる、その語り合う中で是正されていく、正されていく。そういう話合ひの場を教師が組織していく。

教師は組織者なのです。つまり、ある意味では演出者なのです。

つながりあって生きる

—— 「ちのちのみみずきさん」 木下 順二 作 ——

これは、藤六という主人公が、父親ゆずりの古ぼけた頭巾をかぶって、ある雨の日、大きな花嫁の道具を背負って、隣の村に出かけていく。雨が上がって、ちょっと森の中でいっぷくして、汗をふこうと、手拭いでふいていると、今までにきやかにさえずっていた小鳥の音が、急に人間の声に変わる。その小鳥たちの話を聞いていると、自分がこれから、花嫁道具をもっていこうとしている、その長者とんの娘が病氣だという。その病氣は、長者とんの庭の大きな

くすの木が枯れかかっている、そのことが原因なんだ。だから、その大きい枯れかかったくすの木を元気にすれば、娘さんも、元気に立ち直る、とこう言ったことを小鳥たちの話の中から聞き取って、早速、長者ごんの家に行く。行くのですが、長者ごんはそんなこと信じるはずもない。で、藤六は何を聞いたかと言うと、向こうに大きな石があって、その石をどけたらいいんだと、こう言う。そこで藤六は、かけあがって行って、うんとこしょ、うんとこしょ、とどけようとするのですかね。そうするとい、長者ごんは動かすな、と言う。藤六はそんなこと聞かずに、その石をどくと動かすわけですが、動かすと、実は何とぞいから、水がいぼいぼとわいでて、流れ流れて行って、村中の田んぼにずっと水が行き渡る。実は石というのは、長者ごんが自分の田畑にだけ水が行くように、水の根を止めていたのです。その石をどけたから、村中の田んぼに行き渡る。そして、米がうんとできる、そうすると、小鳥たちも喜ぶ。水が行き渡ったために、長者ごんの庭のくすの木も、生き生きとまた生き返る、そして娘の病気がすっかりよくなる。そして、不思議なことに、病気がちだった藤六のお母さんも元気になる。みんなが幸せになる。めでたく、とこう言う話です。

では、一体この話で何を子供たちに考えさせたいのか。この世の中のすべしものは、種目のようにながっているのだという事です。大乗仏教の経典に、華嚴経という経典があります。そのお経だけであらうか、ほかのお経にもあるのですが、インドラの網というたとえ話がある。この世の中のすべしものは、種目のようにながらうか、時間的、空間的に、無限のつながりをもっている、その結び目の一つ一つがあなたであり、私であり、あるいは、その辺の石ころであり、あっちの木であり、こっちの虫けいであり、いろいろなわけです。この世のあらゆるあらゆるもの、森羅万象すべてのものが全部つながりあっている。そして、非常にすばらしい表現なのですが、

その一つ一つがちょうど宝石のように光り輝いているというのです。つまり、あなたは宝石であり、ほくも宝石だ、それぞれが宝石のように、自分の光を発している。そして、向こうの光を受けて、自分はまたそれを返している、また、向こうの光を受け、それを返す。お互いが光をやりとりしているというか、照らしあっているというか、きらめきあっているのだと言っています。そういう風にすべてのものが存在している。これが、つまり、人間観であり、世界観なのです。

この私というのは、この周りの一つ一つの結び目と結びついていて、言ってみれば、周りのすべてのものに支えられて自分というものは存在している。自分はこの世界に一人ぼつんといえるわけじゃない。いろいろなものにつながりあって、支えられている。逆に言うと、自分も、また、周りのものを支えている、そういう風に存在している。インドラというのは、インドの神様なのですけれど、日本では帝釈天と言います。そのインドラの宮殿をすばらしい網のたとえをつかって、そのような人間観、世界観を述べているのです。この世界はインドラの網のようなものだ、一人一人は、その網の結び目にある宝石のようなものだ、お互いに光を放ちあって、きらめきあってもに光り輝いているのだ。そういうすばらしい例え話があるのです。

それを華厳経では、一即一切というのです。一と言つのは自分と考えていい。私という一、その一の中に一切が関わっている、一切がつながっている、一切を抜きにして私という自分はありません。例えば、あなたはお父さんお母さんから生まれました。そのお父さんお母さんなくしては、生まれなかった。でも、生まれただけでは今日、このように育ってはいません。育つためには、いろんなものを食べる。食べるという事は、魚は漁師が取ってきたものを食べる、お百姓が作った米を食べる。食べるだけじゃない、言葉を習う、文字を習う、知識を得る、人から、先生からい

ただく。さまざまな周りの一切のもののおかげで、おかげさまで、私は、今こうして生きています。今、自分が生きていくということは、自分を取り巻く一切のものに支えられて、存在しているのだ。こういう世界観、人間観。私という人間はそういう世界の中のひとつとして、存在しているのだということなのです。

そういうことを実は、まきみみずきは語っているのです。そして、そこで、人間の「業」(ご)と言いますが、長者は自分の田だけを、よかれと思って、利己主義、自己中心の、自分だけ、自分だけと言う考えから水の根を止めるように、石を置いてあるわけです。それによって、村中が水がなくて困っている。小鳥も食べるものがなくて困っている。庭の木、くすの木も枯れかかっている。すべてそうなる。つながりつながって、長者の娘も病気になっている。嫁さんに行こうとというのに、嫁にも行けないで病気で伏せている。親である長者にとってはそれは不幸せです。自分から招いた不幸せです。自業自得というのです、そういうのを。なぜかという、全部つながっているからなんです。どこまでつながっているかは別として、目に見えるか見えないかは別として、全部つながりあっているのです。長者の業が長者自身をも苦しめているし、すべてを苦しめている。

それを藤六がなんとか、長者とんの娘の病気を治してあげたいという、そういう愛情、思いやりを、それを自分の行動によって(業)ですわ(、石を取り除く、それによって水が流れ出す。それによって村中が潤う。鳥たちにもきちやかに、楽しくみえするようになる。庭の木も生き返る。長者とんの娘の病気も治る。治ると言うことは、長者とんにとっては、親として幸せなことですよ。それから自分のお母さんもまた元気になる。つまり、これも、自業自得というのです。自業自得というものは悪い意味だけに使うのではない。善い意味にも使うのです、本当は。

どういふことかという、人間、私が変われば、周りもみんな変わる、これを富澤賢治は「世界が全体、幸福にな

らない限り、個人の幸福はありえない。」と言ったのです。自分だけが幸せになろうとしてもそうはいかない。みんなが幸せになったということが、つまりは私が幸せになるといふことと、同じことなのです。つまりは、こう言っているを無理で言っているも本当にはわかりませんから、物語でわかっていく。例えば宮澤賢治の作品には、そういう作品がいろいろたくさんあります。

それぞれがすばらしい

——「はなっぺいいな」 三木卓作 ——

三木卓の「はなっぺいいな」。花はなせいいのかと言つと、咲いていると、ハチやら、チョウが飛んできてくれる。そして、それに蜜を与える。代わりに、チョウやハチがその花の花粉を媒介してくれる、こうやってお互いに、持ちつ持たれつで、相関関係で生きていける。そう生きていくそのことを幸せ、はなっぺいいなと言っているわけです。しかも、花には赤い花もあれば、白い花もあれば、黄色い花もあります。どの花がすばらしい、どの花が立派と言つことはありません。それぞれ、それはすばらしい。たんぼぼはたんぼぼの花として、すばらしいし、あざみはあざみの花として、ほかの花にはないすばらしさを持っている。花であると言つことが、どうすばらしいことかということを語っている作品です。

花であることがなせすばらしいか、花は全部自分の色を持っている。だから、自分は赤いから白い花になりたいなんて思つことは、馬鹿げたことです。白い花には白い花の良さがある。赤い花には赤い花の良さがある。それぞれの

花の良さがある、そのことを認識する。個性といっても良いでしょう。人をうらやむことはありません。そねむこともないです。自分は自分、人は人であって、それぞれの色をもって咲いている。これがそれぞれの花って言うものの幸せです。それからもう一つは、花はみつを出すことによって、周りのチョウウやハチたちがいっぱい喜んでやってきてくれる。そして、また、自分の花粉を広げてくれる。そしてまた、自分の命を次へ次へと、世代へ世代へと広がっていく。のびていく、それを幸せといっているのです。花っていいなと言うのはそういうことです。

これは何も、花だけではなく、人間だって同じことです。例えば話ですから。つまり、そういうことを、「はなっていいな」から学んでほしいと思います。

むだなものなど何一つない

—— 「気のいい火山弾」 宮澤賢治作 ——

これは噴火のときに、ほかの石と違ってこの火山弾、ペゴ石だけは空中でぐるぐる、くるくる回ってしまっただけに、砲弾のような形になって落ちてくるわけです。ペゴ石だけが丸いのです、周りの石はみな角がある石なのです。ペゴ石はばかにされる。要するにいいはじめの構造です。いいも悪いもない、一人だけちょっと違う。だから、どこか人と違うという点があると、よくいいはじめの対象になります。できても、できなくても、できたらできただけ、できなければできません。いいはじめの対象になる。

いいのは、ペゴ石というものは、周りの石はびび割れて、角のある石ですけど、この石だけは、丸っこい石なんです。

すね。丸っこいということまで馬鹿にされる。軽蔑される。言ってみれば、いじめの対象になる。でも、本人は自分ももう、生まれつきこうなのだからしょうがないじゃないか、これはこれでいいんだとこう思っている。

さて、この中で、おもしろいことに、そこに、一つぶの柏の木の種が落ちる。種が芽生える、ところが風やら雨やら、雪やらがありますから、なかなか、小さい芽生えは育ちにくい。幸い、偶然ではありますが、ペゴ石が（牛のように黒いからペゴ石というのですが）、そこにある。そのために、その陰で、文字通り、その陰のためにですが、柏の木はある程度小さいとき、かこってもらって、伸びていく。それで、現在は大きくなって、昔の背たけよりも、五倍も十倍も大きくなって葉を広げて、そして、下に日陰を作る。日陰を作っていますから、石の上にはやがて風化して苔が生えてくる。ところがその苔が、ペゴ石を馬鹿にするのですよ。

石の上には生えた苔がですよ。ペゴ石に対して、この野原にはいろんなものがあるけれど、お前のように何にもならないもの、無駄な、役に立たないものはないと、馬鹿にする。でも、考えてみてください。なぜ苔は生まれたのか、なぜ石の上で生きていられるか、と聞いて、まず、石があるからですよ。石があるだけじゃなく、雨がふったり、雪が降ったり、日が照ったりして、風化して、表面がわずかに風化しているから。しかも、柏の木が上にかぶさったりして、適当な木漏れ日で、適当な陰と、湿り、露を落としてくれるからですよ。

そういうものはみんなもの網の目の中にあるから、苔はペゴ石の上で生きています。この世に無駄なものは一つもないとこのように言っているのです。この作品は、この世には無駄なものは一つもない、無駄と思えるのは、またそれを認める目がないからですよ。

現在、科学というのは非常に発達してきて、いろんなものを知るようになってきました。しかし、人間が、科学が、

明らかにしたのは、この世界のほんの一部分、ほんのちょっとです。

昔、ニュートンという有名な科学者、そのニュートンが晩年に書いた言葉があります。「自分は浜辺にたっている人間のようなもので、足もとにいっぱい貝がらが落ちていて、その貝がらの一二二つを拾ったにすぎない。また、私の中には膨大な、無限な世界が広がっている。「ほんの一二二つを拾ったにすぎないという、謙虚な言葉を残していますが、私たちが知りうることのできるものは、ほんのわずかなのですね。でも、わずかなではあるけれども、ここがどうなっているかわからないけれども、必ず、これが全部につながっているということは、はっきり言える。どういふつながりがあるかは知らないけれども、どういふつながりがあるかは見えないことがある。しかし、つながりがあることは、はっきりわかっている。そのことだけは、真理なのです。すべてのものがいろんな形につながりあっている。つながりあっていることを私たちは知らないだけで、知らないから、そこにあるものが無駄だと思ったりするわけです。

例えば、害虫対策なんて言っつてね、害虫だから殺虫剤を大量に振りまいて、その虫を滅ぼすということをしますね。ところが実はその虫が、とんでもない、役に立っていたということが、あとでわかったというところが今までもあるのです。私たちがせまい見方で、わずかなことをちょっと知っただけで、これは害虫、これは益虫と、これは役に立つ、これは役に立たないと、こんな風に選別し、レットルを張っていくわけですけれども、それは非常に思いあがったことで、私たちが知りうることは、本当にわずかしかない。これはだめな子供、これは、害虫と勝手に決めていたものの中に、実はそうでないというものがいくつでもある。ある種の昆虫は、ある時期には、ある作物にとって害虫であるけれども、ある時期には逆に益虫になることもある。ある作物にとっては害虫ではあっても、別の作物にとっては益虫であるというところもある。私たちが勝手に、自分が今知っている範囲で害虫だの、益虫だの、プラスになる

だの、マイナスになるだのと、役に立つの、役に立たないのと、こういう風にみているけれども、それは本当に、せまい見方で見ているだけであると思ひ知る必要があります。

「気のいい火山弾」というのは、子供たちに、そういうことを、言わば、わかる形で、おもしろい形で述べているのです。

—— 「度十公園園林」 宮澤 賢治 作 ——

度十公園林というのは、世間から、馬鹿者扱いされている、主人公が、何の役にも立たないと放り出されている荒地、その荒地に、杉の木を何本も植えるのです。世間はみな笑っている。あんなところに杉を植えたって、杉は育つはずがない、なるほど、育たない。はじめは伸びていきますれば、七年百八年百となると、それ以上育たない。なぜかと言つて、杉は直根と言つて、根がずつとまっすぐに下に伸びる性質の木なのです。ところが下に粘土層があつて、根が下まらずと伸びていかないので。ですから、背だけが伸びない。伸びないというところは、建築用材としてはためなのです。建築用材と言つのは少なくとも、ある高さまでは、ある太さで伸びていないと、建築材料にならない。杉と言つのは、私たちは、建築材料として植えていきますね。だから、百本が百本、全部同じように育てるのです。

百本が百本、全部同じように育てる。これが今の学校教育なのです。規格品を育てるわけなのです。規格に合わせ育てる。個性を無視する。

ところが度十が植えた杉は、それぞれが勝手気ままに生きている。勝手気ままに枝のばしてね。全然建築材料にならない、建築材料にならないから、役に立たない。そんなことをやっている度十は世間からもの笑いにされる、こういう話です。ところがどうでしょう、その建築材料として役に立たなかったから、そこが緑の杉の林となったのです。子供たちの遊び場になったのです。度十がなくなったあと、親たちが、度十の思い出の記念の地として、町に売らなかった。周りはほとんど、ほとんど町が開けて工場ができたり、いろいろするのだけど、そこだけが緑豊かな土地として、残った。残ったから、それが今、すばらしい公園になっている。本当の幸せとは何かと言つことを、つまりは、人々に語るそういう公園となりました。とこう言う話なのです。

学校教育とは規格品を育てる。かつて中教審が、期待される人間像と言つものを打ち出して、そうすかんで食って引っ込めましたが、期待される人間像と言つのは企業が要求する人間像です。だから、人材というでしょ。人間と言えばいいところを、人材という、人材という材料でしかないのです。権力にとっては、企業にとっては、規格品なのです。全部同じようにレットルをはれるような、規格品を育てるのです。たまったものではありませんね。

たんぼぼのあの詩を思い出してみてください。こうして花びらちぎって並べてみると、同じです、同じように見えるでしょう。それでもやっぱり、一つ一つ違うのです。だから名前もみなちがう。違うように育てないといけない。こうやって見ると、皆さんそれぞれ違いますが、着ているものの色は違うし、顔はちがうし、みな違いますね。十把一からけであつかったら、一人一人たまったものではありません。いやでしょう。嫌だということが大事なのです。みんな着ている服も、色も形も、髪の色も、顔から、名前も性格もみな違うのです。一人として同じ人はいない。そういう風に、それぞれがそれぞれとして育っていく。それを建築用材にするのだからと言って、同じような規格品

人材、用材、建築材として、育てるといふような教育になつては、おかしいわけですね。そういうことを「度十公園林」といふのは、言わば語っているわけなのです。

ですから、これは、子供にわからせるというより教師の皆さんがわかる必要がある。この教材を子供と一緒に話合ひながら私もいつの間にか、子供たちを人材として、規格に合わせて育てようとしていたのではないかと、気がついてくれたら幸いです。でなければ「度十公園林」を読んだ意味がないですね。

教材といふのは、子供にとって必要だと言っただけじゃなく、教師も、子供も一緒に学び合う、そして、人間とは何か、世界とは何か、幸せとは何か、人間にとって、値打ちとは何かについて語り合つていく必要があります。あの、杉の木は世間の常識から言えば、価値がない。でも、別の観点からすれば、すばらしい公園としての価値をもってきたわけです。値打ちといふものはさういふものです。一つ一つの木がそれぞれ曲がりくねって、それぞれ枝を伸ばしてしげっている。だから、それがいい、全部が全部、北山杉のように、鉛筆を並べたみたいになっているのは、杉にとっては不本意でしょうね。杉は、あんな風に生きたいのではないでしょう。ただ、北山杉といふのは、あのように育てないと、用材とならないから、そのように育てて、あっちこっちの床の間に床柱として役に立っている。床柱にしかならない。でも、それぞれ曲がっている木は、曲がっているように、節のある木は節があるように、みんな適材適所で役に立つのです。

奈良の法隆寺の、棟梁と言われた西岡さんのすばらしい言葉があります。「木にはそれぞれ癖がある。その癖を生かすのがいい棟梁なんだ。働いている大工や、左官屋などの職人は、みんな癖がある。得手、不得手がある。それぞれをそれぞれに生かすのが棟梁なのだ。」棟梁という言葉のかわりに、教師と言つ言葉をあてはめれば、一人一

人子供は個性があるし、悪く言えば癖がある。手づかして困るといってしまおう。でも、管理する教師の立場で言いつて、手づかして困るのですが、観点を交差すると、頼りになる子供とも言えるのです。

資料

たんぽぽ

かわなま ひろし

たんぽぽが

たくさん飛んでいく

ひとつひとつ

みんな名前があるんだ

おーい たぽんぽ

おーい ほほんた

おーい ほんたぽ

おーい ぽたぽん

川に落ちるな

雨のうた つるみ まるお

あめは ひとりじゃ うたえない

まっただれかと いっしょだよ

やねと いっしょに やねの うた

つちと いっしょに つちの うた

かわと いっしょに かわの うた

はなと いっしょに はなの うた

あめは だれとも なかよしで

どんな うたでも しってるよ

やねで とんとん やねの うた

つちで ぴちぴち つちの うた

かわで つんつん かわの うた

はなで しとすと はなの うた

ばったのうた

おうち やすめま

ばった

草の色から

ぴよんと とびだす ばった。

じっとしてれば

はっばと おんなじ ばった。

ぴよんと とばなきや

見つからないのに ばった。

ばった

草の色から

ぴよんと とびだす ばった。

じっとしてたら

はっばに なっちゃう ばった。

ばっただからね

ぴよんと とびたい ばった。

だから わるい

オセーエワ・作 西郷 竹彦・訳

「一匹きの犬が、体をまえにかがめて、はげしくほえたてています。そのすぐはななまきに、かまねにひとりて体をよせて、一匹きの小ねこが、毛をなかだててふるえています。かーっと口をあけ、ニャーオ、ニャーオとなっています。すぐそばに、ふたりの男の子がたって、なりゆきをみていました。

まごから、それをのぞいていた女の人が、とぶようにして、かいだんからかけおりてきました。女の方は、犬をおっほらうと、男の子たちをしっかりとつきました。

「あなたたち、はずかしな奴らよー」

「どつして、はずかしなの？ ほくたち、なんもしていませんよー」

男の子たちは、びっくりにしたように、いりました。

「だから、わるいのですよー」

女の方は、まっかにおこっていました。